



「ペトラシェフスキー事件」のことなど

入 手 麟 雄

昨夏看護 A クラスに夏休み中の読書を問うた所『カラマーゾフの兄弟』と答えて私を喜ばせた学生がいた。

そこで作者のフォードル・ミハイロヴィッチ・ドストエフスキー（1821-81）について、良く知られていることだが、読みかじったことを少し紹介させていただきます。

ドストエフスキーは24歳のとき処女作『貧しき人々』によって華々しく文壇に迎えられたが、その後の作品ではさしたる評価も得られずや、低迷した日々を送っていた。

当時ロシアはニコライ一世（在位1825-55）の時代で、デカブリストの反乱を武力で一掃して即位したこの専制君主は、フランス革命以後急速に押寄せる自由と人権を求める西欧の新思想を秘密警察の力によって苛酷に弾圧していた。しかし、出版の自由、農奴解放等を求めて民衆は秘かに、時に激しく反抗した。知識階級は多少の差はあれ概して新思想に共感を抱いていた。

首都ペテルブルグのミハイル・ブタシェヴィッチ・ペトラシェフスキー（1821-66）の家で、1845年頃から毎週金曜日の夜、「金曜会」と呼ばれる若者達のサークルが開かれていた。ペトラシェフスキーは外務省の若い官吏で、フランスの空想的社会主義者フーリエ（1772-1837）の信奉者であった。ドストエフスキーもこのサークルに1847年春頃から時々出席するようになった。一方、1848年2月、フランスで2月革命が起ると皇帝はますます民衆の蜂起を恐れ、政治活動に過敏になった。「金曜会」も当局の嫌疑を受け、1849年4月23日未明、関係者と見られる34名が一斉に逮捕された。その中に27才のドストエフスキーもいた。4月22日付、侍従武官オルロフからサンクトペテルブルク憲兵隊チュデルノフ少佐への秘密指令の書出しを見よう。

「記。勅命ニ依リ貴官ニ命ズ。明朝4時「マラーヤ・モールスカヤ」街・「ヴォズネセンス

キー」大通角、「シーリ」持家、3階、「ブルメル」貸室、退役工兵中尉・著述家フォードル・ミハイロヴィッチ・ドストエフスキーヲ検挙シ、其ノ有スル全テノ書類並ビニ書物ヲ封印シ其等ヲ「ドストエフスキー」の身柄ト共ニ皇帝陛下直屬官房第3課へ提出スベシ。

（以下略）」（中村健之介訳）

逮捕された34名の内、重要人物とされるペトラシェフスキー、ドストエフスキー等13名は、ペテルブルクのペトロパブロフスク要塞監獄の中でも最も厳重な監禁棟として恐れられているアレクセーフ半月堡の独房に収監された。ここでの尋問に対してドストエフスキーは微罪についてこれを認めたが、他のメンバー達との関係は全て曖昧にしか語らなかった。ペトラシェフスキーも当局の追及に屈することなく、仲間をかばって主宰者らしい誇りある態度を貫いた。元々秘密結社に当るようなグループではなく、証拠となりそうな品は巧みに処分されたので、当局は重要な証拠も証言も得られなかった。軍事裁判所での裁判は9月31日に始り、11月26日に終わった。判決はドストエフスキー等21名を銃殺刑にすべしとした最悪の結果であったが、12月17日付陸軍検事総長の決定として皇帝への嘆願の形をとって全員を減刑した。皇帝は上の決定に多少の軽重を付して裁可した。幸いドストエフスキーは要塞における8年の懲役の所を4年に減じられ、その後兵卒として勤務するよう裁可された。ところが、これ等一連の決定は一切被告人達には知らされなかった。この決定を宣告するに当たり、陸軍大臣等により憎むべき芝居が仕組まれた。1849年12月22日付で兄ミハイルに宛てたドストエフスキーの手紙の一節を見よう。

「きょう、12月22日のことです。僕たちはセミョーノフ連隊の練兵場へ引き出されました。そこで僕たち全員は死刑の宣告文を読み上げられ、十字架に接吻させられ、頭の上で

サーベルが折られ、そして僕たちは死刑服(白いシャツ)を着せられました。それから3名の者が刑の執行を受けるため柱の前に立たされました。〈僕はこのとき列の6番目に立っていました〉。3名ずつ呼び出されるので、したがって、僕は2番目の番に当っており、余命は1分以上はなかったわけです。(途中略)だがやがて、退却命令の太鼓が鳴りわたったかと思うと、柱に縛りつけられていた3人が連れ戻され、皇帝陛下が僕たちに生命を与えてくださるとの令旨が読み上げられました。

(以下略)」(小沼彦彦訳)。この残酷な茶番劇がドストエフスキーに与えた苦痛は深刻であった。生死の極限にある人間の心理を体験した彼は、これを何度も作品の中に書いている。例えば『白痴』の中で、主人公ムイシュキン公爵が、政治犯として銃殺刑の宣告を読みあげられ20分後に特赦の勅令により罪一等を減じられた男から聞いた話として次のように書いている。

「ついに生きていられるのはあと5分間ばかりで、それ以上ではないということになりました。(中略)友達との別れに2分間ばかりあて、いま2分間を最後にもう一度自分自身のことを考えるためにあて、残りの時間はこの世の名ごりにあたりの風景をながめるためにあてたのです。(中略)しかし、男に言わせると、その瞬間最も苦しかったのは、絶え間なく頭に浮んでくるつぎのような想念だったそうです。《もし死なないとしたらどうだろう!もし命を取りとめたらどうだろう!それは何という無限だろう!しかも、その無限の時間がすっかり自分のものになるんだ!そうになったら、おれは1分1分をまる100年のように大事にして、その1分1分をいちいち計算して、もう何ひとつ失わないようにする。(以下略)》」(木村浩訳)

こうしてドストエフスキーはその2日後、1849年12月24日深夜、酷寒のペテルブルグの町から、足枷を着けられ、仲間2人と別々の無蓋の馬籠に乗せられて、クリスマスの明りが家々の窓を照すのを見ながら(愛する兄の

家の窓も見えた)シベリアのオムスク要塞監獄に向けて護送された。この監獄での4年間にわたる地獄のような生活は『死の家の記録』に余す所なく描写されている。この間にドストエフスキーは癲癇(てんかん)の発作に苦しむようになる。今では治療可能になったこの普通の病気の発作について、『白痴』の中で次のように書いている。(ムイシュキン公爵が友人パルフォン・ロゴージンに襲われる場面)

『パルフォン、私には信じられないよ…。』それに続いて突然、何かしらあるものが彼の目の前に展開したみたいだった。並々ならぬ内なる光が彼の魂を照らしたしたのであった。こうした瞬間が、おそらく、半秒くらいもつづいたであろうか。しかし、彼は胸の底から自然にほとばしり出て、いかなる力をもってしてもおさえることのできない恐ろしい悲鳴の最初のひびきを、はっきりと意識的に覚えていた。つづいて彼の意識は一瞬にして消え、まったくの暗闇(くらやみ)が襲ってきたのであった。(木村浩訳)

発作の瞬間の生命の燃えるような輝きと、直後に襲う死の実感。生と死についての間はドストエフスキーの心を瞬時も離れ得ないものとなったであろう。

4年間の監獄生活と5年間のシベリアのセミパラチンスクでの兵卒としての勤務の後、軍務を解かれ、許されてペテルブルグに戻ったのは1859年12月であった。10年に及ぶシベリアでの体験は、ドストエフスキーの思想を社会主義とは根本的に異なるものにしていった。ドストエフスキーはギリシャ正教の中に人類の救いを見出そうとした。

ドストエフスキーの以後の作品は、一言で言えば神の存在についての苦悩に満ちた問いかけではなかろうか。ドストエフスキーの思想とその後の生き方について、ちがう立場から批判することは容易であろう。しかし、ドストエフスキーの書き表した神への祈りと深く複雑な人間精神の様相は、他のいかなる作家をしても表し難いもののように思われる。

(数学)

平成 4 年度 教養図書館統計

1. 開館総日数 281日

2. 年間入館者数 117,910人
1日平均入館者数 419人

3. 施設使用状況

記念室	研修室	ゼミ A	ゼミ B	教職員閲覧室	合 計
31	176	263	105	16	591

4. 学年別〈所属別〉貸出比率

	単 行 本	雑 誌	合 計	比 率 (%)
1 学 年	5,300	198	5,498	79
上 級 生	1,300	121	1,421	21
学 生 計	6,600	319	6,919	79
教 職 員	1,087	803	1,890	21
合 計	7,687	1,122	8,809	100

5. 雑誌現行受入タイトル数

	購 入	寄贈・交換	研 究 室 用	小 計
国 内 雑 誌	296	613 (418)	16	925 (418)
外 国 雑 誌	48	48	2	98
合 計	344	661 (418)	18	1,023 (418)

() 内の数は紀要のタイトル数を示す

6. 雑誌タイトル別貸出ベスト5

順 位	合 計	雑 誌 名	学 生	教 職 員
1	289	朝日新聞縮刷版	6	283
2	176	毎日新聞縮刷版	0	176
3	158	読売新聞縮刷版	1	157
4	38	Newton	38	0
5	22	基礎ドイツ語	22	0

7. 現在蔵書数（視聴覚資料・単行本）と平成4年度貸出数

（平成5年3月31日現在）

蔵 書 数		比率 (%)	主 題	N D C	貸出数 (冊)	比率 (%)
A V資料	単行本(冊)					
805	5,220	7	総 学	000	192	3
13	6,764	8	哲 学	100	628	8
28	8,074	9	歴 史	200	414	5
100	11,494	13	社 会 科 学	300	331	5
127	20,816	24	自 然 科 学	400	3,685	48
35	2,499	3	工学・工業	500	141	2
105	1,170	1	産 業	600	49	1
934	5,606	8	芸術・体育	700	408	5
731	4,992	7	語 学	800	481	6
64	15,026	17	文 学	900	1,024	13
0	2,518	3	未 分 類	新書他	334	4
2,942	84,179	100	合 計		7,687	100

2001年

藤原俊朗

2001年は8年後です。その年の春の卒業生がこの大学に入学してくるのは、獣医学科・医学部の学生は1995年(2年後)、その他の学部・学科の学生は1997年(4年後)です。2001年の卒業生には、いったい何が期待されるでしょうか。大学は、どのような教育システムを用意すれば良いでしょうか。この頃そんなことを考えています。

おそらく全ての卒業生がコンピューターを使えることを期待されることでしょう。パーソナルコンピューターは、「全ての個人が、コンピューターパワーを使える」ことを目標に目覚ましい進歩を遂げてきています。パーソナルコンピューターは個人のためのコミュニケーションの道具(媒体)です。おそらく、全ての分野でパーソナルコンピューターが有効に使われるようになることでしょう。

現在、多くの人が紙と鉛筆を自由に使い、その使い方を子供の時から自然に練習します。パーソナルコンピューターも、そのように扱われるようになるはずです。コンピューターの中に記憶された情報は何となく「はかなく、本物でない」ような気がしますし、子供がコンピューターを使って「絵を描いて遊んだり、文字を書く練習をする」など、とんでもないような気もします。しかし、それは、「気がする」だけで単に我々の慣れの問題だと思います。

2001年に生まれた子供は、そのような環境で育つことでしょう。彼等は、自然に、自分の頭脳とコンピューターの連携プレーの方法を学びます。しかし、2001年の卒業生は現在

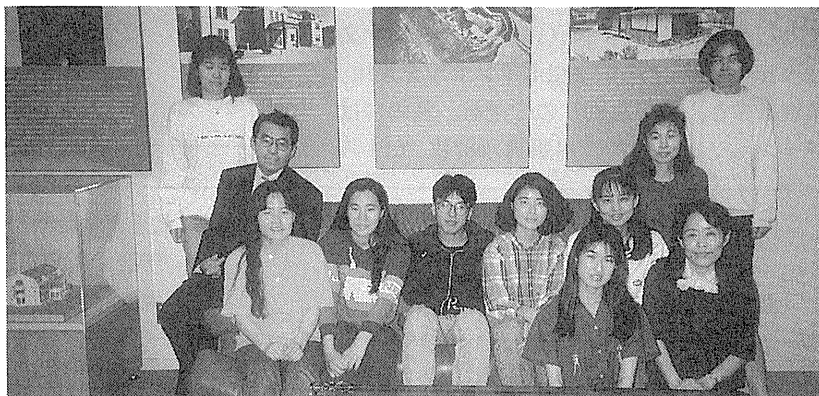
すでに、15~17歳になっています。中学・高校のいわゆる「情報教育」が完全にうまくいったとしても、情報メディアの発達はその上回るので、大学での「情報教育」がますます重要になるでしょう。私は情報機器が複雑になり、扱い方が難しくなることを心配しているわけではありません。内部構造は複雑になるでしょうが、扱いは逆にだんだん簡単になります。私の言いたいのは、(1)そのころのコンピューターは、ノートをとったり、情報を整理したり、自分の考えをまとめたり、計算をしたり、それらをまとめて発表するなど、情報メディアとしての能力を十分に持つということ、(2)そしてそれらの能力と、各人の頭脳の持つ能力をうまく連携させれば、個人の情報処理能力をおおいに高められるということ、(3)そのためには大学を含めた教育機関での組織だった教育が必要であるということ(4)すでに15~17歳になっていて、「自然に」コンピューターに親しめなかった学生には、特にそうだということです。

2001年のパーソナルコンピューターは、A4のノート位の大ききで、開くと現在のレーザープリンター程度の解像度のフルカラーのディスプレイが2面あり、手書きでもキーボードでも、音声でも入力ができる。電池で一日使え、いつでも“すぐ”使える。無線ネットワークが内蔵されていて、地球の上のどこにいても、登録したネットワークにアクセスできる。オペレーティングシステムは、“紙”のようなもので、データ(文字、グラフィック、サウンド)の基本的入出力・レイアウト

を受け持つ。ソフトウェアはその上で「縫い目なし」に動作する。「ワードプロセッサ」は、賢い日本語変換、手書き入力を受け持つ。「辞書」と言うソフトは、英語はもちろん、日本語の本格的な辞書を内蔵し、スペルチェック、漢字のチェック、文法チェックを行う。「アイデアプロセッサ、アウトラインプロセッサ」は、アイデアや文章の構造をビジュアルに描き出し、考え事の手助けをする。「予定表」を使えば、スケジュール管理や、締切を忘れないようにできるし、「AV」を使えば、静止画、動画、サウンドを「紙」に貼って、加工・再生できる。「計算」・「グラフ」はその名のとおりに「データベース」は「紙」の上のデータを何でも整理して、簡単に検索、参照、再利用できるようにしてくれる。「通信」は、外部の「紙」とのデータのやりとりをする。そんなこんなをいっさいまとめて、10万円程度で買える。2001年は、そんな年になると思う。

もうすぐ「2001年の卒業生」が入学してきます。2001年の北里大学の卒業生が、(1)コンピュータをあたりまえのように使える、(2)豊かな情報処理能力がある、と評価されることを目標に教育システムを作りたいものです。そのためには、(1)施設・設備の整備はもちろんのこと、(2)情報教育のためのすぐれた教員組織が必要です。

(情報科学)



—第11回なんじゃもんじゃの会—

「第11回なんじゃもんじゃの会」だより

図書館と学生の交流の場として親しまれている「なんじゃもんじゃの会」が、去る6月2日(水)、教養図書館3階記念室にて開催されました。今回は、グアテマラ・コスタリカをひとり旅した松原俊峰さん(看護学部4年)を囲んで、様々な話を聞くことができました。赤々と燃え上がる火山、どこまでも広がる青い空、屈託のない人々の顔・・・スライドの中には、どれもこれも日本にはない雄大さ、豊かさが広がっていました。

たとえ短い期間とはいえ、見も知らぬ土地で生活するのは大変な事だったでしょうが、その中で得たものは、松原さんの生涯の宝となることでしょう。

今回は、少人数だったものの、「こういう経験ができるのは、学生のうちだけだ」と皆さん口々に言っていました。

何事もまず行動してみることが大切なのだという事を痛感した日でした。

ウィリアム・モリスと『ケルムスコット・チョーサー著作集』

瀬谷幸男

イギリスの数ある私家版の中でもとりわけ名高いのは、1891年に、ウィリアム・モリスがロンドン西郊のアパ・モールに設立した小さな書籍工房、「ケルムスコット・プレス」である。モリスは詩人、装飾デザイナー、工芸家等々多方面で活躍した人だが、特に愛書家の興味を惹くのは、彼が全身全霊を傾注して意匠を凝らし、理想の書物を追及して、“近代ブックデザイナーの父”と称されるに至った点であろう。

最初、彼は聖職者をめざしてオックスフォード大学に入学するが、そこで、後にラファエロ前派の巨匠となるバーン＝ジョーンズという終生の友と知り合い、芸術家へと志を転じて、次第に中世風の理想主義的傾向を強めていった。彼は西洋中世の書物にその「美」の範を求め、若くして中世後期の写本を模した彩色稿本を製作し、自己の理想実現のため中世の工房スタイルを持つ自前の書籍工房を設け、紙漉きや活字のデザイン等に至るあらゆる印刷工程に習熟し、8年間で刊行した私家版本は53点にも達した。

ケルムスコット・プレス刊本中の最大傑作は、「印刷されたすべての印刷本の中で最も美しい本」と言われる『チョーサー著作集』である。原本の体裁はフォリオ（二折）判で、用紙はパーチ紙（425×292）で564頁。活字は見出しがトロイ・タイプ（18ポイント）、本文はチョーサー・タイプ（12ポイント）を使用。印刷は赤と黒の二色刷りの二欄組。装飾にはバーン＝ジョーンズの本版挿画87枚、モリス

の手による木版扉と大型縁枠装飾画14枚、枠装飾18種類、大型頭文字装飾画26種類からなる。本書の作成には着手から5年を要し、総印刷部数は438部で、その芸術的価値から世界の愛書家、蒐集家の垂涎の的となっている。

表紙の図版は『カンタベリ物語』の有名な総序歌の冒頭、「時は四月。夕立ちがやわらかにやってきて、三月ひでりの根もとまでしみとおってしまう——」の部分である。葡萄唐草模様の縁飾り、文頭のWhanの装飾語、見出しの二行のレタリング、バーン＝ジョーンズによるチョーサー自身の肖像挿画やそれを囲む装飾等からも、本書の美的版面構成に情熱を注いだ、モリス畢生の超極美の大作の一端を窺い知ることができよう。（英語）

夏休みのお知らせ

- 1) 長期貸出
貸出期間（雑誌は対象外です）
7月21日（水）～9月17日（金）
- 2) 開館時間
7月23日（金）～9月14日（火）
平日：午前9時～午後5時
土曜日：午前9時～午後1時
- 3) 閉館
7月26日（月）～7月31日（土）
蔵書点検の為
8月9日（月）～8月14日（土）
一斉閉館の為

閲覧ニュース70号

1993.7発行

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里1-15-1

発行責任者 手塚 甫

電話（0427）78-8005